

曇鸞における智慧と名号

——親鸞における「智慧の名号」の基礎的考察——

田 中 無 量

序 論

親鸞（一一七三―一二六三）は、『唯信鈔文意』において、「智慧の名号」⁽¹⁾、「無上智慧の尊号」、「廣大智慧の名号」、「智慧の名号」と示し、「智慧の名号」を、四度に亘り語っている。このような「智慧」と「名号」を組み合わせる説示を、親鸞が思想的に強く影響を受けたと考えられる真宗七祖に求めた場合、従来の研究においては、第三祖曇鸞（四七六―五四二）の思想に、その淵源を見いだそうとするものはみられない。しかし筆者は、曇鸞が「智慧」の論理に基づいて、名号論を展開していると考ええる。そしてそのような論の展開は、「真宗七祖」第一祖の龍樹や、第二祖の世親には見られない特徴的な理解であるから、第三祖曇鸞の思想に、親鸞の「智慧の名号」の思想的淵源を見いだし得ると考える。以下に示したい。

一 曇鸞思想の構造

北朝の曇鸞は、僧肇（三八七―四一四）の般若学の影響を受けながら、世親の『浄土論』（以下、『論』）を註釈し、『往生論註』（以下、『論註』）を著している。筆者は『論註』の思想構造について研究してきたが、その結果、筆者の『論註』理解は、従来とは異なる視点を持つので、最初にそのことを明かしておきたい。従来、曇鸞研究は、龍樹の二諦説を、原理的な側面によつて明らかにした「約理の二諦」の立場——例えば、インド中観派の月称における立場——に基づいて解釈している。この「約理の二諦」とは、俗なる領域（世俗諦）と聖なる領域（第一義諦）を、明確に区別する二諦説である。従来の研究は、この「約理の二諦説」に立って、曇鸞思想が解釈されてきたといえる。その一例となるのが、曇鸞の名号論である。曇鸞は、『論註』巻下「起観生信章」に、如来の名号について「名即法」「名異法」（大正四〇・八三五下）とす

るが、その理由を、当該箇所にか明かしていない。この曇鸞の名号論について、従来、「名即法」の説示のみに注目し、従来の『論註』の思想構造（約理）から、考察がなされた。その思想構造とは、

- (a) 般若・真諦・第一義諦・法性法身・略 ↓ 法（法性）
 (b) 方便・俗諦・妙境界相・方便法身・広 ↓ 名（名号）

の二種に配当して理解できるとするものである。ゆえに、「名即法」の名号論は、「方便」(名)と「般若」(法)の関係や、「法性法身」(法)と「方便法身」(名)の二種法身説の⁽⁴⁾関係に対応して理解できるとされた。まさしくこの曇鸞解釈の立場は、

約理の二諦

曇鸞の思想（従来の研究による）

- (a) 真諦・般若 ↓ 般若・真諦・第一義諦・法性法身・略 ↓ 法（法性）
 (b) 俗諦・方便 ↓ 方便・俗諦・妙境界相・方便法身・広 ↓ 名（名号）

とする立場であるといえよう。しかし、曇鸞が『論註』⁽⁵⁾の思想的基盤に置いたものは、以前にも論じているように、僧肇の空思想であると考えられよう。これは、龍樹造羅什訳青目訳『中論』（以下、羅什訳『中論』）の約教の二諦説——教説・言説における二諦——を継承するものである。龍樹は、羅什訳『中論』第八偈において、「諸仏依二諦為衆生説法。

一以二世俗諦、二第一義諦。」（大正三〇・三二下）と示し、諸仏が、「二諦」に基づき、衆生のために法を説くことを述べる。そしてさらに「若人、不能知三分別於二諦、則於深仏法不知真實義。」（第九偈、同前・三二下）、「若不依世俗諦不得第一義。不得第一義、則不得涅槃。」（第十偈、同前・三三上）と明かしていく。ここにいう二諦（二種類の真理）とは、世間慣行としての真理（世俗諦）と、最高真実としての真理（第一義諦）である。羅什訳『中論』の二諦説は、「諸仏が二諦によって、衆生の為に法を説く」とあることから、「約教の二諦」（言教・教説の二諦）であると考えられる。教説において二種の真理を立て、その言説（教説の二諦）を超える真実を指し示している。⁽⁶⁾そして曇鸞教学の思想的基盤となる僧肇の般若思想も、この「約教の二諦」を継承するものである。すなわち、僧肇は、言説として示される全てを「方便」とし、その「方便」において「真諦」（非有）と「俗諦」（非無）の二諦を表わし、それらを相即と示しつつ、両者を否定する非有非無によって、言説を超克した、真実（第一真諦・真諦⁽⁷⁾）を明かしている。さらに、その「真実」と、「方便の二諦」は、寂（真実）と用（二諦）であり、「寂用」は体一・相即の関係にあるといえる。⁽⁸⁾曇鸞『論註』においても、僧肇の「非有非無」の論理と類似する論理が語られており、曇鸞は、僧肇思想を継承していくのであろう。要するに、僧肇から曇鸞への

思想構造の展開は、

僧肇の約教の二諦の説示	曇鸞の思想 (筆者の立場)
(a) 第一真諦・真実	↓ 般若 (慧)
(b) ①名教 (言教) の真諦	↓ 智慧 (「智」 方便・「慧」 般若)
(b) ②名教 (言教) の俗諦	↓ 方便 (智)

となろう。しかし従来の『論註』解釈は、(a) 般若・真諦と(b) 方便・俗諦の二種に配当するものだが、僧肇に説示される「約教の二諦」の立場とは異なるものである。僧肇思想を踏まえるならば、(a) 「真実」・(b) ①「名教の真諦」・(b) ②「名教の俗諦」の三種に分類すべきであり、曇鸞も同様の立場に立つものである。このことが明らかになるのは、次項にみる『論註』の「智慧」の論理である。曇鸞は、(a) 「般若」(真実)、(b) ①「智慧」(名教の真諦・二諦相即) (b) ②「方便」(名教の俗諦)の三種を説示し、さらに、名号論と関連付けて理解できる「名」と「義」の関係(名義撰対)を明かしていく。

二 曇鸞の「智慧」の論理と名号論

曇鸞は、『論註』の「名義撰対」(大正四〇・八四二下)において、

名義撰対者、向説智慧慈悲方便三種門撰取般若、般若撰取方便、
 応レ知。般若者達レ如之慧名。方便者通レ権之智称。(中略)然則智
 慧ト方便相縁而動、相縁而静。動不レ失静智慧之功也。静不レ廢

レ動方便之力也。是故智慧慈悲方便撰取般若、般若撰取方便。
 (傍線は筆者。)

と述べて、「名と義が撰し対する」ことを主題に掲げながら、『論』所説の「智慧・慈悲・方便」の三種門と「般若」の関係を再解釈している。従来、右の文は、曇鸞の説示する「智慧」を、「般若」と「方便」のどちらか一方のみに配当して解釈し、(a) 「般若」と(b) 「方便」の相即関係を語るものであるとされた⁽¹⁰⁾。しかしその理解は『論』の立場であり、曇鸞においては、「智慧の智」を(b) 「方便」、「智慧の慧」を(a) 「般若」であると示すことから、「智慧」を(a) 「般若」と(b) 「方便」のどちらか一方のみに配当することはできない。曇鸞は、『論』所説の(a) 「般若」と(b) 「方便」の相即関係を、(b) ①「智慧」(二諦相即)の内に包摂して語り、ここに、(a) 「般若」、(b) ①「智慧」、(b) ②「方便」の三種の概念を説示している。ゆえに、『論』の構造(a) 「般若・真諦」・(b) 「方便・俗諦」の二種と『論註』の構造(a) 「般若」(僧肇の第一真諦)・(b) ①「智慧」(僧肇の言教の真諦)・(b) ②「方便」(僧肇の言教の俗諦)の三種とは、異なるのである。また、『論』において「智慧」は、般若の場合や方便の場合があり、必ずしも一定していない。それに対し『論註』では、「智」 || (b) 「方便」、「慧」 || (a) 「般若」として、一定している。曇鸞は、『論』所説の(a) 「真諦」と(b) 「俗諦」の二諦(約理)の相即関係を、僧肇思想に基づ

くことで、「方便」(言教)の内において(b)①「智慧」(方便の真諦)と(b)②「方便」(方便の俗諦)の相即を語り、僧肇の約教の二諦の立場を継承していくのである。さらに、これを「名」と「義」の「撰・対」の関係からみれば、「名」(b)②「方便」と「義」(a)般若の「撰」(即)は、(b)①「智慧」(方便即般若)に、「名」(b)②「方便」と「義」(a)般若の「対」(異)は、(b)②「方便」(方便異般若)になると考えられる。そしてこの(b)①「智慧」と(b)②「方便」の関係の内に見いだされる、「名」(方便)と「義」(般若)の関係に基づき、曇鸞は『論註』の名即法・名異法の名号論を構築していくのであろう。

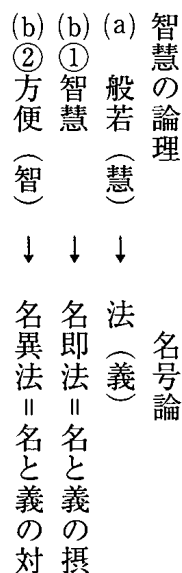
曇鸞は、阿弥陀如来の名号について、次のように明かしている。

釈迦牟尼仏、在三王舍城及舍衛國、於大衆之中、説無量壽仏莊嚴功德。即以三仏名号為三經體。(同前・八二六中)
阿弥陀如来方便莊嚴真実清浄無量功德名号(同前・八三四下。傍線は筆者。)

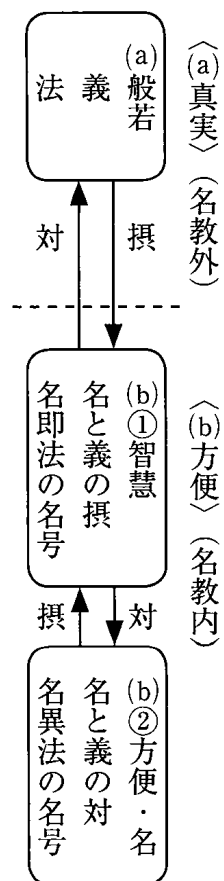
右の説示をもって、曇鸞は、「莊嚴」名号、「方便」莊嚴「名号」と示している。ここで、先に明かした「名義撰対」の論理から、曇鸞の「名即法」・「名異法」の名号論を考えてみたい。まず「名即法」の名号とは、阿弥陀仏の「名」(b)「方便」と「法」(a)「般若」が即(撰)する、「名義撰対」にいうところの(b)①「智慧」(方便即般若)に、「名異法」の名

曇鸞における智慧と名号(田中)

号とは、阿弥陀仏の「名」と「法」が異なる(対)、⁽¹⁾「名義撰対」にいうところの(b)②「方便」(般若と対する方便)に対応するといえる。要するに、「名即法」の名号は、「名義撰対」の(b)①「智慧」(方便即般若・名義の撰)に、「名異法」の名号は、「名義撰対」の(b)②「方便」(般若と異なる方便・名義の対)に対応して理解できる。すなわち、



と示すことができる。この『論註』の「智慧」と名号論の構造を図示すれば以下の通りである。なお、『論註』全体の名号論については、別稿に論じている。⁽¹⁾



三 僧肇の「名」と「物」の関係論理

この曇鸞の名即法(智慧)と名異法(方便)の名号論の背景に、僧肇の「名」と「物」の関係の論理を挙げることがで

きよう。僧肇は、「名」が必ずしも「物」自体と即するわけではないこと、つまり、「名」は「物」に異することを明かしている。僧肇は、『不真空論』に、「以夫物物於物。則所物而可物。以物物非物。故雖物而非物。是以物不即名而就実。名不即物而履真。」（大正四五・一五二上）と述べ、「物」はそれ自体で成立することはなく、他の物によって、その「物」自体が成立することを示すとともに、その「物」の「名」に即して、「物」の本体があるわけではないことを明かしている。また僧肇は、「放光云。諸法仮号不真。譬如幻化人。非無幻化人。幻化人。非真人也。夫以名求物。物無当名之実。以物求名。名無得物之功。物無当名之実。非物也。名無得物之功。非名也。是以名不当実。実不当名。名実無当。万物安在。」（同前・一五二下）とも説示する。ここで僧肇は、般若経によれば、諸法はあくまで仮の名であつて、真実ではない。また、名によって物を求めると、物には名に相当する実はなく、物によって名を求めると、名には、物を得るはたらきがない。ゆえに、名は実にあたらず、実は名にあたらないと、明かしている。かかる箇所でも、名は実と相応しないことを、述べている。さらにこの文に続く箇所で、僧肇は、「故知万物非真。仮号久矣。」（同前・一五二下）と述べて、万物は真ではなく、元来、仮号、つまり仮の名であることを、述べている。その一方で、僧肇は、『般若無知論』に、「夫物無

以自通。故立名以通物。物雖非名。果有可名之物当於此名矣。是以即名求物。物不能隠。」（同前・一五三下）と明かす。ここで僧肇は、物はそれだけで自らを表わすことはできず、「名」によって「物」を表わす。ゆえに、「名」に即して「物」を求めれば、物は隠れようがないことを示し、ここに「名」と「物」の「即」の関係も表わしている。要するに僧肇は、「物」とその物の「名」の関係について、即の場合もあれば、即ではない場合もあることを明かしている。この僧肇の「名」と「物」の関係論理に基づき、曇鸞は、阿弥陀仏の「名」と「義」（法）の関係を説示していると考えられる。つまり、僧肇が名と物の関係を、必ずしも相応するものではない、とする指針と同様に、曇鸞は、阿弥陀仏の「名」とその「義」が、必ずしも撰するとは言えないことを明かしたのである。そして、この名と義の撰（b）①智慧と、対（b）②方便に分類して、いわば動的に説示することで、「名即法」と「名異法」の名号論を構築したと考えられる。

結論

親鸞の「智慧の名号」の基礎的考察として、曇鸞の「智慧」の論理と名号論について論考した。曇鸞の「智慧」の論理は、「名義撰対章」に語られている。曇鸞は、その「名義撰対」において、「智（＝名）・慧（＝義）」の論理を説示し、それに

基づいて、「名即法・名異法」の名号論を展開している。この曇鸞の名号論は、僧肇の「名」と「物」の関係論理に基づくものであるとも指摘できる。ただし、僧肇と相違する点をあえて指摘するならば、僧肇はあくまで「名」と「物」の関係を明かすのみであるが、曇鸞においては、「智慧」の論理を明かすことにより、名号（名）と法（義）の関係論理を構築している。そして曇鸞以前の真宗七祖には、「智慧」と「名号」を直接結び付ける思想は見いだし得ないことから、この曇鸞の「智慧」と名号の論理が、親鸞の「智慧の名号」の源流となつていると考えられよう。

- 1 『浄土真宗聖典註釈版』七〇一、七〇二、七〇七、七一三頁。
- 2 拙稿『『往生論註』の「二種法身」と「広略」の関係再考』（『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』二九、二〇一三年）、同『往生論註』の「名即法」と「名異法」の名号論（『印仏研』六一—二、二〇一三年）等。
- 3 藤堂恭俊『無量寿経論註の研究』（仏教文化研究所、一九五八年）一七九頁。
- 4 渡邊了生『『浄土論註』における二種法身説の教理史的研究』（『真宗学』八一、一九九〇年）。
- 5 拙稿『『往生論註』所説の平等法身と未証浄心の二菩薩の関係——曇鸞の「名義撰対」の論理からの考察——』（『真宗研究』五八、二〇一四年）。
- 6 安井廣済『中観思想の研究』（法蔵館、一九六一年）一七九

- 一八〇頁、瓜生津隆真『ナーガールジュナ研究』（春秋社、一九八五年）一一六頁等。
- 7 僧肇は、『肇論』「不真空論」に「然則真諦独静於名教之外。摩訶衍論云、諸法亦非有相、亦非無相、中論云、諸法不有無者、第一真諦也。」（大正四五・一五二上）中。傍線は筆者。）と示し、名教（言説・方便）を超克した非有非無の真理を、「真諦」とも「第一真諦」とも示す。
- 8 僧肇は、『肇論』「般若無知論」に、「用即寂。寂即用。用寂体一。」（大正四五・一五四下）と示している。
- 9 曇鸞は「一法句」（大正四〇・八四一中）について、僧肇思想の影響とみられる「非即非非」の百非の論理を示し、ここに「一法句」の本質が、僧肇の「第一真諦」（非有非無）と同概念であることを明かす。
- 10 深励『註論講苑』卷十一（『浄土論註講義』法蔵館、一九七三年、六五七—六六三頁）。
- 11 拙稿『『往生論註』の「名即法」と「名異法」の名号論』（『印仏研』六一—二、二〇一三年）。

〈キーワード〉 僧肇、曇鸞、親鸞、約教、約理、二諦、名義撰対、名即法、名号論、智慧

（龍谷大学非常勤講師）